
Dreaming Nighty Knight

長月チャカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D r e a m i n g N i g h t y K n i g h t

【Nコード】

N7714U

【作者名】

長月チャカ

【あらすじ】

異世界に召喚されてしまった箱崎リョウと、巻き込まれるように”半分だけ”異世界に渡ることになった千早ミナ。かつて世界を救った異世界の勇者を召喚した巫女姫の末裔であるセーラと、その巫女姫を守る神殿騎士のアリス。そして異世界召喚の秘宝をセーラたちから奪い、リョウたちを召喚した謎の禁術師コニス。リョウたちは元の世界に戻るために、セーラたちは奪われた秘宝を取り戻すために、彼ら彼女らの追走劇が、異世界『ドレアムド』で幕を開けるのだった。

※この作品は試作段階です。更新予定はしばらくありませんので、
悪しからず。

○禁術師と巫女姫

冷たい空気が磨き抜かれた窓ガラスのように、その不気味な月の模様を鮮明に映し出していた。顔のように丸い月に、ぽっかりと骸骨の眼のように丸い影が二つ。頬を裂くように弧を描く口が、地上を見下ろして笑っているかのようだった。

『魔王の微笑み』——今夜の月はそう呼ばれていた。

その国では月に一度だけ顔を見せる満月は、毎回その模様が違う。ある時は酒の杯だったり、また別の時は二人の男女が向きあっている姿だったり。

したがって、その国では暦の読み方がその月の模様になぞらえられている。杯の月、双子の月、砂の月……十二ある模様を一巡すると、再び杯の月から新しい年が始まるのだ。

そして、今は『魔王の月』。季節でいえば冬。不吉な名前の月である故に、人は外に出ようとはせず、家でひっそりと暮らすことが慣習となっていた。ただそれは縁起の悪さだけという訳ではなく、この時期は作物が不足しがちで、雪が積もって雪崩が起きたり、動物達の少なくなった山では腹を空かせた魔獣が人を襲ったり、何かと不幸の起きやすい時期でもあった。

実際にそういうことが月の影響で起こるとは考えられないものなのだが、人というものは悪いことが起こると何かのせいにしたくなるもので、神殿騎士であるアリスも今夜のいざこざを全て月のせいにしてしまいたい気分だった。

まるで魔王が嘲笑っているかのようだ。トリス城の西の廊下の窓から覗き見た月をキッと睨みつけながら、アリスはそんなことを思った。

「アリス！」

ガシヤンガシヤンとフルプレートアーマーに身を包んだ兵士が走

つてきて、アリスは視線を月から廊下へと移す。女性にしては短めの黒髪が、月の光を反射してふわりと揺れた。

「ジャステイン、どうだった？」

端正な顔立ちも、その気迫のせいで色気などどこにもない。きりつとした眉に、吊り上がった目の色は琥珀色だった。

アリスはジャステインに問うと、全身を金属に包んだ男は息を弾ませながらも、青ざめた目をアリスに向けた。

「まずいことになった。宝魔殿の封印がやぶられた」

「ばかなっ、あれは大魔導師ローハルがかけた封印だぞ！？」　そう簡単に破られるシロモノじゃないはずだ」

「だが破られたのは事実だ。その証拠に、『次元の宝珠』が盗み出されている」

アリスの顔に焦燥が浮かぶ。ジャステインが決して冗談を言う人間ではないのは、アリスがよく分かっている。

「わかった。私はセーラのところへ行く。宝珠が盗み出された今、一番危険なのはセーラだろう」

「巫女姫様か。分かった、そっちはまかせろ。神殿には男は入れないしな。俺は犯人を探そう。くそっ、こんな時にラーハルトのやつは何をやってるんだ。あいつがいれば、魔術で簡単に見つけられそうなものなのに」

「いないものは仕方がない。とにかく、居る者だけで探そう」

互いに頷き、逆方向に走り出す。

「コニスか、くそ……」

アリスは唇を噛んで、拳をぎゅっと握りしめた。犯人は分かっている。『禁断のコニス』——ありとあらゆる禁術に手を出した外法の魔術師であり、裏の世界でさえも疎んじられている男だ。

神殿騎士のアリスが裏稼業の人物の名前などそう知っているはずもないのだが、その男の噂だけは、とくにここトリス城には轟いていた。

というのも、この国の宝『次元の宝珠』は、禁術の触媒として有

名だったからだ。他に類を見ない宝物として保管されているというよりも、世に出してはならないものとして封印されているといった方が近いだろう。

そのような代物であるからして、禁断という二つ名を持つコニスに狙われるのは道理であった。それゆえに、事前に対策を講じておきながらこの体たらくでは立つ瀬がない。

だが、禁術の触媒である宝珠もそれだけでは意味を成さない。宝珠と、その力を引きだす宝具が必要であり、それは代々『巫女姫』が常に身につけるように義務付けられている。

宝珠を奪ったであろう禁断のコニスは、次に巫女姫の宝具を狙ってくるはず。言い換えれば、これが最後の防衛線だ。

アリスは魔王の月を恨みがましく睨みつけると、かつて異世界の勇者が召喚されたという神殿へと急いだ。明らかにとぼちちりを受けた月は、何を気にするでもなくひょうひょうと空に浮かぶのであった。

この世界には『異世界の勇者』の伝説がある。

かつて魔王が存在した頃、世界は未曾有の危機にあった。どこからともなく現れた魔王は、強力な魔の軍団を従えてこの世界を蹂躪した。

この世界を作った女神はこれを憂い、人々に『次元の宝珠』と『次元の宝具』を授け、異世界から勇者を召喚させたという。次元の扉を通じて現れた青年は、人とは思えぬ力を以て魔王を倒し、世に平和をもたらしたのだった。

その時に勇者を召喚したのが神の啓示を受けた一人の巫女であり、今では初代の『巫女姫』と呼ばれている。『次元の宝珠』を継承するトリス王家に対して、『巫女姫』とは代々『次元の宝具』を守る一族の称号なのだ。姫と呼ばれているものの、政治的な関わりは全くといっていいほどない。

その第六代目にあたる巫女姫——セーラは、神殿の祭壇に膝をつき、手を組み合わせて祈りをささげていた。ゆったりとした白い布の巫女服こそ質素だが、指にはいくつもの指輪が嵌められており、セーラが頭を持ち上げるとジャラジャラと幾重にも重ねられたネックレスや黄金の髪飾りが音を立てた。腰にまで届く長い金髪に隠れてはいるが、その耳にはピアスがつけられている。

これらのアクセサリーは単に彼女を着飾するという意味だけではなく、それぞれが魔力を込められた呪具だ。セーラは巫女であると同時に魔術師——正確に言うなら、召喚術師でもあるのだ。

まるで彫像のように祈祷の姿勢を保ち続けていたセーラだったが、身につけたアクセサリーをじゃらじゃらと言わせながら、だが清らかな水が流れるような動作で立ち上がった。

うつすらと目を開くと、淡い空色の瞳があった。猫の目が月に反射して光るように、彼女の瞳もうつすらと青く輝いているように見えた。

そして、薄い唇が開き、小さく空気を振動させる。

「ここは男子禁制ですよ。即刻、出ていってもらいましょうか、『禁断のコニス』さん？」

振り返らず、まだあどけなさを残す少女は、毅然とした態度で言った。静まり返った礼拝堂に、張り上げた訳でもない声が必要以上に響いた。

背後からくくと、男にしては少し高めの声が返ってくる。

「男子禁制。いい響きだね、ゾクゾクしちゃう。それにしても、もうバレちゃったのか。この騎士団は意外と優秀だね」

全く出ていく様子のないコニスだったが、もちろんこれで出ていくようなら最初からここにいないだろう。

セーラはゆっくりと振り返る。賊を目の前にして物怖じしない彼女は、己の力に自信があり、また宝具を守らなければならない使命があったからに他ならない。

だが、コニスを目の前にして彼女はぎょっとした。それは、目の

前の男が彼女の想定し得る人物像と到底結びつかなかったからだ。

目の前に立つコニスとは、何とも小柄な男だった。革のパンツに麻布の白い服を着た、町人と変わり映えのしない格好だ。

だが、一目みて普通の人とは違うことに気付く。

身体は針金のように細く、手足などは枯れ枝のようだ。月の光しかないこの場所では、死人のように青白い肌が、まるで墓地から蘇ってきたのかと思わせる程に不気味さを演出していた。毛糸で編んだようなカップの形をした帽子を被っていて髪の色は分からないが、鼻は低く蛇のような切れ込みが入ったような形で、唇は肌の色に溶け込んでまるで口に穴が空いているだけのように見える。

そして、ギョロっとした大きな目。瞳の色が灰色の所為か、まるで死んだ魚のようだ。その目が、どこか愉しげにセーラを見つめていた。

セーラはコニスを見て、憐れんだ。禁術師のなれの果て。何故このようなことになってまで禁術に手を出すのか、理解に苦しむ。

「愚かなことです。そのような身体になってまで禁術に手を出し、一体何が得られるというのです」

言われたコニスは、ほとんどない眉毛を寄せて、すこしムツとした様子で言った。

「失礼な。この顔は生まれつきだ」

……………。

静寂であることが常であるはずの礼拝堂に、痛い沈黙が訪れた。気まずい空気が流れる中、先に口を開いたのはセーラだった。

「あなたが奪った宝珠、返してもらいます！」

「わお、何もなかったことにしたよコノ人。ま、別にいいけど。さしてきて、それじゃあ目的を果たすしますかね。どれが宝具かな？」
コニスは品定めをするかのような目つきでセーラの頭の前からつま先までジロジロと見た。数あるアクセサリーを象った呪具の中に、

一つだけ目的の宝具があるはずだ。無駄に多い装飾も、宝具を隠すのに一役買っていたようだ。

コニス是不敵な笑みを浮かると、腰を落として静かに唇を震わせた。ただの文字の羅列を繋ぎ合わせたかのような意味のないような言葉。しかし、変化が起こる。コニスの周囲に淡い橙色の靄がどこからともなく現れ、コニスの右手に吸い込まれるように収束していったのだ。

魔法。魔術師のみが持ち得る神秘の力。これが基本攻撃魔法であることは、ある程度魔法をかじった者ならばすぐに分かるほどメジャーな魔法だ。

コニスが詠唱を始めたのを見て、セーラも詠唱を始める。コニスとは違い、セーラの周囲には白い球状の光がポツポツと現れた。

コニスが詠唱を終える。

ファイアボール
『火炎弾!』

指先から炎の玉が迸る。一人を飲み込むほどの大火球だ。本来であれば握り拳ほどの多きのはずだが、使う魔術師の力量によって大きさの異なるそれは、そのままコニスの魔術師としての強さを示している。

物凄い勢いでセーラを飲み込もうとする火球だが、セーラは慌てることもなく詠唱を続けている。炎の光で巫女装束が赤く映える。熱風が先に届き、セーラの頬をチリチリと焦がすも、セーラは慌てることなく詠唱を終えた。

ホワイト・カーテン
『極光の護布』

セーラの周囲にあったいくつもの白い光の玉が急激に縦横に広がり、他の光の玉と重なって一枚の壁を作った。その壁が火球と衝突する。その瞬間、巨大な火球は一瞬で霧散した。拮抗するとか、そういうことは起こらない。触れた瞬間に炎が花を散らしたかのように弾けたのだ。

コニスが楽しそうに笑う。

アンチマジックスペル
「絶対魔法防御の神聖術か。それに――」

コニスの濁った眼に映るもの。笑みを浮かべるセーラは両手を高く掲げ、そして周囲にいくつもの魔法陣を浮かばせていた。

光で出来た円の中心に、うねうねとミミズのような紋様が描かれている。その魔法陣は文字を中心として回転し、球状となる。回転速度が緩くなり、再び円に戻った時、中心の紋様は消えており、代わりに手の平に乗るぐらいの人型があった。白い肌に、可愛い大きな目。緑色の髪が不自然に揺れて、髪と同じ色の服を着ている。その小人たちが、周囲に六人。精霊から力を借りて術を行使する精霊術とは違い、精霊そのものに力を貸してもらおう召喚術だ。

セーラが目の前を指差し、高らかに声を上げる。

「風の精シルフィードたち。あいつをやっつけて！」

何とも締まらない命令だが、風精たちは些細なことなど気にしないらしくコニスに向かって宙を走った。風の精と呼ばれるだけはある、その姿はまるで風のように速い。

コニスは目を見開き、その場から横に飛び退くと同時に手から火炎弾を放った。先ほどとは違い、握り拳ほどの大きさだ。威力を下げて速射性を上げたのだ。

三発ほど撃った火球は、二発は避けられたが一発だけ風精の一体に命中した。その場に小さなつむじ風が巻き起こり、風精の一体が消える。残りは五体。

「神聖術に召喚術か。まったく、巫女姫と呼ばれるだけのことはあるね！」

叫びながら、風精が作った風の刃を避けた。と同時に呪文の詠唱に入る。先ほどと同じくオレンジ色の光が右手に収束していった。

『火炎弾《ファイアボール！》』

詠唱時間は先ほどよりも圧倒的に短く、威力もそれに比例して小さな火球を生み出す程度だ。それでも風精たちには十分らしく、五発放ったうちの三発が命中し、風精は残り二体となる。

少し余裕が出来てきたのか、コニスは一発セーラに向けて撃ってみた。だが予想通り、コニスの火球は極光ホワイト・カーテンの護布によって防がれて

しまう。

「これは、ちょっと厳しいかも」

コニス は風精の攻撃を避けながら苦笑した。先ほどセーラに魔法を撃った時に見た光景。セーラの前方に、巨大な魔法陣が出来ていたのだ。大きさはセーラの身長約三倍。目の前の風精とは比べ物にならない程の強力な何かを召喚しようとしているのだ。その証拠に、セーラが身につけている呪具のほとんどが共鳴を起こしている。だがコニスはここにきて唇を思いっきり吊りあげた。悪魔の笑みを思い浮かばせるようなその顔は、まるでこの現状を理解していないかのように見える。強力な召喚体の予兆と、未だに残っている風精二体、セーラを守る鉄壁の魔法障壁。コニスにとっては絶望以外何物でもないはずだ。

セーラはそのコニスの表情を見て、危うく集中力が途切れて召喚術を中断しそうになった。不気味だ。そして何よりもおかしい。禁術師として名を轟かすはずの男が、未だに正統派魔術しか使っていない。もしここが闘技場か何かで観客でもいれば、クリーンな試合に賛辞が述べられていることだろう。

油断してはいけない。あの男は人の道を踏み外した外道なのだ。つけ入る隙を見せることは許されない。

「おいで——ガラテア」

全力をもってあの男を倒す。その決意を示すように、セーラの目の前には、巨人とも思わせるほどの女戦士の姿があった。肌は異常な程に白い。人間の肌では比較することが出来ないほど真っ白な肌はどこか無機質で、気味が悪い。黄金の鎧を纏い、顔を半分ほど隠すヘルメットを装着している。そして右手には炎のような曲線を描く剣。

それを見て、コニスは目を見張った。

「……『断罪のガラテア』か。ボクを相手にそれを選ぶとは、なかなか洒落がきいてるね」

残りの風精を片づけると、コニスは腰に手を当てて笑った。罪に

罪を重ねた禁術師と、断罪の名を持つ戦乙女がにらみ合う。だがその対比は大人と子供どころではない。コニスの体格が小柄なのも相俟って、まるで弱々しい子犬のようだ。

ガラテアが歪な曲線を描く剣を振り下ろす。コニスは呪文を詠唱しながらそれを横に避けた。針金のような身体からは想像もつかない俊敏さだ。

呪文を唱えるコニスの足元に、薄らと桃色の光の筋が走る。魔法というものは予兆現象である程度どのような魔法か特定できるものの、コニスの使う魔法はセーラの知らないものだった。

禁術かもしれない。そう思ってセーラは身構える。

地面を走る光の筋が無数に増えると、コニスは魔法を発動させた。
ロースウィップ・バインド
『棘縛陣』

コニスの足元を走っていた光が、ガラテアに向かって駆ける。そして、その途中で地面から植物の蔓が堅い石床を突き破って現れた。薔薇のように棘のついた蔓が、ガラテアの身体に巻き付く。一本一本が大人の胴周りぐらいの太さのある。ガラテアはが引っ張ってもギユウギユウと音を立てるだけで、引き千切ることとは出来ない。

「ガラテア！」

セーラが叫ぶ。そしてすぐに呪文の詠唱を始めた。セーラの周囲に風が巻き起こる。風の刃で蔓を切ろうとしたのだ。

だが、コニスの行動の方が早かった。

「ふう。悪いけど、君には退場してもらおうか。あまり遊んでる時間もないんでね」

コニスが手の平を蔓に巻かれた戦乙女の方に向けると、ガラテアの周囲に召喚陣のような光の輪が現れた。

「なっ——」

セーラが驚愕の声を上げる。コニスはニツと笑うと、その輪は召喚術を使う時と同じように回転し、ガラテアを包み込むように球体を作った。

そして回転が遅くなると、中にいたガラテアはその姿を消してい

た。

セーラは苦虫を噛み潰したような顔になった。召喚術師としては天敵となる魔術——退魔術。本来はゴーストや一部の悪魔などの星^{アストラル・バディ}幻体——実体を持たない物に対して有効な効果を持つ魔法だが、同じ星^{アストラル・バディ}幻体で構成される召喚生物もまた例外ではない。

今のは召喚術と全く逆のプロセスをたどった魔法であり、ガラテアはコニスによって強制退還されたのだ。もっとも、退魔術の対象となる召喚生物が動いてしまうと失敗になるのだが、束縛の魔法と狭い空間内——ガラテアにとってだが——ではその条件も容易にクリアできる。

つまり、セーラがガラテアを召喚したことが失敗だったのだ。もっとも、コニスが退魔術を使用出来るということを知るはずもないのだから詮無いことではあるのだが。

「さ、宝具を渡してもらおうか」

コニスが一步詰め寄ると、セーラが一步後ずさる。他の召喚生物を呼ぶにしても目の前の禁術師に対抗できるものは召喚に時間がかかるし、こう面と向かった状態では風精を呼んでも時間稼ぎにもならないだろう。

ゴクリとセーラは生唾を飲み込む。万事休す、と頭に絶望がよぎったところで、視界に何か動くものが見えた。

ほんの少しの表情の変化だった。セーラの目がぴくりと僅かに動いた。ただそれだけのことを、コニスは見逃さなかった。

コニスは身を低く屈める。その瞬間、先ほどまで首が有った場所を何かが横切った。ブオン、と空を切る音が遅れて届き、コニスの頭上を何かが通り過ぎ、そしてセーラの前に立ちはだかる。

「アリス！」

「セーラ、大丈夫!？」

甲冑を纏った黒髪的女騎士が、コニスを睨みつけながら言った。セーラは小さく頷くと、すぐに召喚陣を呼び出した。大きさは、セーラよりも一回り大きいものだ。ガラテアほどではないが、強力

な魔法生物だろう。

アリスが剣を構え、セーラが召喚生物を呼び出す。互いに声を掛け合っただけで、互いにやることを既に見出している。

コニス突然の乱入者に眉をひそめながら、だが少し上機嫌に言った。

「随分と可愛らしい名前の騎士様だね。残念だけど、君の出番はもうないよ」

アリスはふっと鼻で笑う。戦いの中で口を開くのは彼女の主義ではないのだが、セーラの魔法の時間稼ぎが目的ならそれもやぶさかではない。

「冗談は顔だけにしてもらおうか」

「ちよっ、これでも結構気にしてるんだけど!？」

わざとらしく頭を抱えるコニスに、アリスは少し困惑した。《禁断》と揶揄されているはずの男は、勝手な想像だがもつと陰湿な男だと思っていたのだ。

だが、油断はしてはいない。アリスとの戦闘の跡が残る礼拝堂の様子を見れば、どれだけ激闘があったのかは容易に推察できる。

油断しているとすれば、向こうの方。未だに頭を抱えているコニスに向けて、先手必勝とばかりにアリスは石床を蹴った。

白銀に輝く刃が空を斬る。流れるような動きに、まるで本当に空が切れているのかと思うような剣筋が見えるようだ。

だが、その剣はコニスに届かない。一閃、二閃と剣を振り続けても、コニスは魔法すら使わずに俊敏な動作で避けている。

その余裕の表情に苛立ち、アリスは舌打ちをしながら大きく一歩踏み込んで、白銀に輝く刃を大きく横に薙いだ。

コニスはそれを見て後ろに大きく跳躍する。刃はコニスの首の手前を横切る――はずだった。

「――え？」

ざんっと音がして、胴体と離れた頭が変な声を出した。自分の意志とは無関係に遠のいていく景色の中、コニスは自分の首を切り落

とした得物を見た。明らかに長くなっているアリスの剣。それを見た時、コニスは全てを理解した。

「……魔器使い、だったか」

胴体が後ろ向きに倒れ、首がゴロゴロと石床を転がっていった。首を切り落としたというのに血がほとんど出ていないことが気になったが、あの異様な見た目と禁術師ということで、おそらくそういうものののだろうか。二人は納得した。

アリスはふうと息を吐き、普通の剣とは違う不思議なそのの長さを元に戻し、鞘に納めた。その背後ではセーラは詠唱を中断させたところだ。回転していた光の輪は何かを召喚する前に薄らと影を薄くしていった。

「さすがアリス。助かったわ」

劳いの言葉をかけられて、アリスはセーラの方に向き直るが、いつもと違うセーラの姿に少し違和感を覚えた。

「セーラ？ 宝具はどうしたんだ？」

「え？」

いつも身につけている髪飾りがなくなっている。アリス自身その事に気付いていなかったらしく、髪飾りがあつたはずの場所を何度も撫でまわし、そしてそれが無いことを知ると真っ青になった。

くすくす。

アリスの背後から聞こえてくる笑い声。嫌な予感がしてならなかったが、アリスはこめかみから汗を流しながら振り返った。

笑い声の主はコニスだった。首だけなのに、アリスたちを見て笑っている。後ろでセーラがひっと悲鳴を漏らした。

「探し物は、これかな？」

首だけのコニスが唇のない口を大きく開き舌を大きく出した。その舌の上にはセーラが身につけていたはずの髪飾りがあつた。アリスもセーラも目を丸くしている。一体、いつの間に？ 何故それが宝具だと分かった！？

二人の疑問を見透いたのか、コニスは髪飾りを口の中に引っ込め

ると楽しそうに喋り始めた。

「ガラテアを出した時、唯一これだけが魔力の反応を示さなかった。それだけで、これが宝具だってことは想像できたさ。もっとも、二人の反応で確信に変わったわけだけれども」

セーラがあつと声を出した。強力すぎる召喚生物を出したことで、身につけている呪具が全て共鳴を起こした。それが仇となったのだ。アリスが再び剣を抜くが、コニスは今全く動けないというのに余裕の表情を貫いていた。

「君の出番はもうないって言っただろう？ もう終わってるんだよ。後はこれを持ち帰って、異世界人を召喚するだけさ。でも、なかなか楽しかったよ。正直”本体”じゃなくて良かったと思ってる。次はこうはいかないよ、魔器使いのアリスちゃん」

「ま、待て！」

アリスの問いに答える前に、首だけのコニスに突然変化が訪れる。コニスの顔が急にただれ、その蒼白だった顔の下から赤みのある肌が生まれてきたのだ。さらに顎や口元から髭が生え、その顔は全く知らない別人になっていた。

同時に、首の切り口から急に血が大量に吹き出した。胴体の方も同じで、こちらも針金のような身体から肉突きの良い一般男性のものと変わっていた。

「ラーハルト!？」

アリスの顔が真っ青になり、見覚えのあるその顔に駆け寄った。間違いなく、先日から行方不明になっていた同僚だ。ごろりと転がる生首を見て、胸がどくと高鳴った。この首を切り落としたのは、他でもない自分だ。

「……禁術」

セーラがぼそつと呟く。他人の身体を乗っ取り、かつ本人は安全な場所から好き勝手に操ることの出来るという最低最悪の魔術。今目の前にいる男は全く関係のない人物だろう。

道理で先ほどの戦闘中に禁術を使わなかった訳だ。あれはコニス

本人の身体ではなかったために、使わなかったのではなく使えなかったのだろう。

アリスは見知らぬ被害者であろう男の生首の前まで歩み寄ると、片手を額の前まで上げて黙禱を捧げた。そして立ち上がり、セーラの方に向き直る。

セーラはこくと頷いた。やるべきことは分かっている。

その日のうちに二人の姿は城から消えた。空に浮かぶ魔王の月は、今夜の出来事を嘲笑っているかのようだった。

一・夢か現か

チチチと歌う雀の囀りと共に、箱崎リヨウは目を覚ました。あまり寝起きがいいとは言えないリヨウは、二三度その場で寝がえりを打った後、青と白のチェック柄の布団を持ち上げて上半身を起こした。

窓際のベッドで大きく欠伸をする。カーテンを開くとまだ陽が出る前のようで、少し薄暗かった。いつもより少し早く起きたということは、いつもなら鬱陶しいぐらいにけたたましく鳴り響く目覚まし時計が大人しくしていることで分かるのだが、どうにも血液が頭に昇り切っていないらしく、朝焼けの空をしばらく見続けてから貴重な睡眠時間を無駄にしたことに気付いた。

時計を見れば午前六時三十分。通い始めてから八カ月が経とうとしている東坂高等学校のホームルームが始まるのが八時二十分で、学校まで歩いて二十分とすれば、少し早い時間だった。

二度寝をするのは微妙な時間だと、上半身を起こしたまま肩を落として、そしてつい先ほどまで見ていた夢のことを考える。

——変な夢だったな。

お城の中。変な男と巫女と女騎士が魔法と剣で戦って、最終的には女騎士が男の首を切り落として、

「うへえ」

そこまで思い出してリヨウは唸った。

その夢の光景はもうあまり覚えてはいない。そこにいた人たちの顔は思い出せないし、何かを話していたような気もするが何を言っていたのかも覚えていない。

ただ、夢を見ていた時は妙なりアルさを感じていたのは覚えている。まるで自分がその場に居合わせたような……。

リヨウは視線を自室にあるテレビの方に向けた。その入力端子には黄色と白と赤のケーブルでゲーム機と繋がれている。昨日深夜ま

でやったゲームのせいかな、と一人納得し、リヨウはベッドから這い出ると冬の寒い空気に肩を震わせた。

いつも通りに洗顔と朝食と歯磨きを済ませ、いつもよりのんびりと朝のニュースを見て、いつも当てにしていけない占いの結果を見てから、いつもの時間に家を出た。

早起きは三文の得とはいうものの、得をしなければ逆に損をした気分になる。そんなことを考えながら、リヨウは通学路の真ん中で欠伸を噛み殺した。

どうも、眠い。いつもより三十分ぐらい早く起きただけなのに、まるで徹夜明けのような眠さだ。友達と徹夜で麻雀をやっていた時の方がまだ覚めているんじゃないかと思う。

学校の門まで着いた頃には、欠伸も何回目になるのか分からないぐらいだった。

「おっはよ、リヨウ。なんか眠そうだね？」

口に手を当てて欠伸をしていると、横から馴染みのある声が聞こえてきた。

「ああ、ミナか。おはよ」

目を擦りながら隣に視線をやると、幼馴染の千早ミナがこちらを覗きこんでいた。ショートボブの、くりっとした目の女の子だ。明るく人懐こい性格で、友人たち曰くミナを狙っている男子は結構いるらしい。もっとも、小さい頃から一緒にいるリヨウにとっては、ミナを異性として見るのには少しだけ違和感があったが。

「どうせまたゲームでもしてたんでしょ。あんまり引き籠ってるとオタクになっちゃうよ」

「ゲームはしてたけど、そんなに夜更かしはしてないんだけどな。ふぁ」

どうも思考が回らないらしいリヨウは、ミナの軽口にも気付かずに、止まらない欠伸を噛み殺す。

ミナの方も「こりゃ駄目だ」と肩をすくめるのだった。

リヨウとミナは同じ学年だが、リヨウのクラスは三階にあり、ミナのクラスは二階と分かれている。途中の階段の踊り場で、ミナは手を振った。

「じゃあね、リヨウ。授業中に居眠りすんなよ」

ミナがおどけて言ってみても、リヨウは「はいはい」と気のない返事をするだけで、確実に寝るな、とミナはリヨウの背中を見送りながら一人ごちた。

その直後のことだ。

「……リヨウ！」

「ん？」

どうしたのかとリヨウは振り返る。階段の踊り場で立ちつくしているミナはどこか驚いたように目を見開いていた。

「ミナ？」

リヨウが声をかけると、ミナはハツとしたように我に返ったようだった。

「あ、うん。ごめん、なんでもない。じゃあね」

慌ててその場から去るミナの様子に、リヨウは少し訝しげに思いながらも、教室が二階のミナが羨ましいと思いつながら、自分のクラスに向かうために階段を登った。

教室に着くとやかましいばかりの喧騒が聞こえてきて、眠気が常に襲ってきているリヨウには若干辛いものがった。

クラスの席替えて勝ち取った窓際という好スペースにある自分の席に着くと、隣の席に座っている友人の古賀がリヨウに気付いて声をかけてきた。

「よう、おはよう……なんかえらい眠そうだな」

「実際眠いんだよ。夜更かししたわけじゃないんだけどな。とりあえず寝るわ、先生来たら起こして」

そのまま突っ伏した。眠くて、眠くて仕方がない。なのに、目を

瞑っても眠れなかった。依然眠気ばかりが襲ってきて、なのに眠れないというのは、思いの外キツいとリヨウは思った。

結局、眠れないまま先生がクラスの戸を開く音でリヨウは頭を起こした。隣で古賀も一瞬リヨウを見たが、特に気にすることもなく前を向くのだった。

一時限目が担任の先生の授業だったので、ホームルームから続いて授業に入った。だがリヨウはあまりの眠さに、いつホームルームが終わって授業が始まったのかも分からないぐらいだった。頬杖をついてウトウトとする。とてもじゃないが授業の内容など頭に入っていない。

もう諦めて、先生に怒られるの覚悟してリヨウは再び机に突っ伏した。もう、頭を持ち上げる気力もない。目を瞑り、眠気に身を任せる。意識がまどろんでいるのかどうかも分からなかった。

『――やあ』

リヨウは驚いて、がばっと頭を起こした。反動で椅子が後ろの机にぶつかり、机がたと音を鳴らした。授業中だったクラスが静まり返り、皆がリヨウに注目している。

リヨウは若干息を荒げ、先ほどみた夢を思い返していた。光景というよりも、顔だ。凹凸の少ないのっぺりとした顔に、死人のような青白い肌、死んだ魚のようにぎよろっとした灰色の目。昨晚の夢で見た、あの男だ。あの男の顔が、自分を覗きこむようにして、声をかけてきたのだ。

「お、おい。箱崎、大丈夫か？」

先生が自分を心配そうに見ていて、自分がおかしいことに気付く。まるでマラソンでも走ってきたのかと思うほどに汗が噴き出て、だというのに体の芯は冬の空気とは別に冷え切っていた。

「すいません、体調が悪いので保健室にいつてきてもいいですか？」

体調が悪いといった割には、はきはきとした口調だった。それでも先生が駄目だと言わなかったのは、それほど顔色が悪かったということだろう。誰か連れて行けと先生が言くと、古賀が付き添ってくれた。

一階にある保健室まで行くと、保険医の先生がリヨウを見て驚いていた。よほど顔色が悪いのだろう。保険の先生のイメージをそのまま映したような優しい女の先生は、タオルで汗を拭いてくれて、その後熱を測るように指示してきた。隣で古賀は口を開くこともなく、先生に介抱されているリヨウを羨ましそうに見ていた。

熱はなく、体調はどうかと聞かれて、身体がだるいだけ答えた。そういえば、いつの間にか眠気が消えていることに気付く。

何かの病気という訳でもなさそうなので、保健室のベッドで休ませてもらうことになった。体調が悪いままなら帰ってもいいと言われて、ベッドを囲っているカーテンが閉められた。カーテンの向こう側では先生と古賀が何か話しているようで、ドアが閉じられる音がしたのはきつと古賀が出ていったのだろう。

ふう、と溜息を吐く。一体、あの夢はなんだったのか。いくら悪夢だとしても、まるで漫画のように汗が噴き出るなんて普通じゃない。何よりも、そこまで怖い夢でもなかった。

ただ、リアルだった。

夢の中の人物だというのに、まるで現実が存在するかのような錯覚がリヨウの頭を混乱させた。乗り物に弱い人は動いている景色と動いていない自分との違和感で酔うらしいが、リヨウの場合は現実と夢の区別がつかず、それで酔ってしまったかかもしれない。

保健室のあまり質のいいとは言えないベッドに横たわっていると再び眠気が襲ってきた。またあの夢は見たくないと思ったが、抵抗虚しくリヨウの意識は夢の中に沈んでいくのだった。

＊

先週から告知されていた通りに数学のテストが行われていた千早ミナのクラスは、カリカリと答案用紙に答えを記入することで皆が精一杯だった。試験時間の半分を過ぎたというのに、未だにミナは答案用紙は半分しか埋まっていない。

ミナは別に数学が苦手だとか成績が悪いとかそういうことはなく、むしろ成績はいい方だ。なのに筆が進まないのは、今朝リヨウに感じた違和感が尾を引いているからに違いなかった。

やたらと眠そうなりヨウは、確かにいつもとちよつと様子が違ってたけど、寝不足なら誰もがこうなるだろうという程度で、それだけなら特に何かを思うこともなかった。

ただ、階段を登っていくリヨウの背中が、薄らと透けたような気がして、気味が悪かった。存在が希薄になり、そのままどこかえ消えてしまいうような不思議な感覚だった。

思いがけず声をかけたものの、当のリヨウはなんでもないようにケロッとしていたのでミナは慌てて誤魔化したのだが、妙な胸騒ぎが止まらない。気のせいだ、と納得できない自分がいる。こういうのを、虫の知らせというのだろうか？

結局テストは空欄をいくつか残したまま提出することとなった。テストの出来が悪かったことよりも、リヨウのことが気になって仕方がない。

残りの授業も頭に入らず、昼休みになっていつもお弁当と一緒に食べている友達の誘いを振り切って、すぐにリヨウのいる教室に向かった。時間が経てば経つほど、不安で胸がいっぱいになる。

リヨウの教室の前で中を窺うと、リヨウが座っているはずの席には別の女の子が座って友達とお弁当をつづいているのが見えた。それを見て、不安が一層広がる。

「あれ、千早さん？　もしかしてリヨウを探してる？」

不意に声をかけられて、ミナは振り返った。声をかけてきた古賀とは、リヨウと仲がいいということもあってそれなりに親交もある。ただ――これは古賀に限ったことではないのだが――幼馴染とい

うことで仲の良い二人を、何か特別な関係だと思っている節がある。だからか、妙に古賀がニタニタと笑いを堪えようとしているのが目に見えた。

もつともミナはそういう態度には慣れっこで、古賀の思惑には触れてやろうとは思わずもなかった。

「古賀君。リヨウがどこいったか知ってる？」

古賀は「やっぱりか」という表情を、隠すつもりもないらしい。

「あいつなら、一時限目で体調悪いつて保健室に行ったよ。今見てきたけどまだ寝てた」

「え、体調悪いつて、どうかしたの!？」

焦った様子で問い詰めるミナに、古賀は驚いて一步後ずさった。まさかそこまで心配しているとは思わなかったのだろう。

「いや、別に大したことはなさそうだよ？ 熱もないらしいし、風邪じゃないっぽいし」

そう言われても、不安が拭えないのは何故だろうか。実はリヨウがとんでもなく重い病氣にかかっているんじゃないか、という考えも浮かんで、縁起が悪いとすぐに打ち消した。

「そっか。うん、わかった。ありがと」

素っ気なくお礼を言つて、ミナは少し駆け足気味で別れた。遠くで階段を降りていくミナを見届けて、きっと保健室に行ったんだろうなとあたりをつけた古賀は、

「青春だなあ」

と呟いた。

「失礼しまあす」

恐る恐る、といったようにミナは保健室の戸を開いた。そういえば、保健室に来るのは初めてだと、中の様子を見てふと思った。案外質素な部屋だ。いや、保健室というものはそういうものだろう。部屋を中心に小さな机と椅子があって、棚にあるプラスチックの容器は、多分薬品だ。目に入っただけのものはそれぐらいで、先生の他には

誰もいないようだった。

「こんにちは。どうかした？」

部屋の奥の方にある事務机で作業をしていたらしい先生は、ミナに気づくと手を止めて、そしてにっこりと笑った。

「箱崎くん、います？」

未だにドアから半分だけ体を出しているミナは、中をキョロキョロしながら尋ねた。少なくともこの部屋にリョウはいないようだが、奥の方に部屋が続いているから、もしかしたらそっちにいるのかもしれない。

その考えはどうやら当たりだったようだ。

「いるわよ。奥の部屋で寝てるけど、何か用だった？」

ミナはぶんぶんと首を横に振った。

「い、いえいえ。ちょっと心配で見にきたんです。奥の部屋、入ってもいいですか？」

「いいけど、起こさないようにね。別に、もう大丈夫なのかもしれないけど、随分と具合も悪そうだったしね」

許可を貰ってホッと胸を撫で下ろし、ミナは部屋に入って後ろ手でドアを閉じた。

「そんなに具合悪そうだったんですか？」

保健室の中を歩きながら、ミナが尋ねる。

「あら、同じクラスじゃないのね。そりゃあ、酷かったわよ。それこそゾンビか何かかって思うぐらい」

可愛らしい先生だが、その例えは保険医としてどうなんだと内心思いながら、ミナは苦笑いをしつつ隣の部屋に入った。

いくつかベッドがあって、手前の一つがカーテンで仕切られていた。音を立てないように中を覗いてみると、リョウが幸せそうな顔をしてすうすうと寝息を立てていた。

その顔を見て、なんだか気が抜けてしまった。完全に取り越し苦労で、気を揉んでいた自分に呆れてしまう。

リョウの寝顔に安心すると、急にお腹が空いてきた。そういえば

お昼休みに入ってから何も食べていないのだ。お昼ごはんを食べられなかった腹いせにリヨウの頬を人差し指で突いてやると、リヨウはそれを避けるように反対側に寝返った。

クスクスと笑って、もうちょつと遊んでいたい衝動に駆られたが、これ以上やると起きてしまいそうなので辞めておいた。さて戻ろうかと思ったところで、胸元がチカツと光ってミナは目を瞬かせた。

先ほどリヨウの頬を突いた時に、胸元からネックレスが顔を出してしまっただけらしい。紐で結ばれた先に、綺麗な瑠璃色の石がぶら下がっている。これは子供の頃、リヨウと喧嘩した時に仲直りの印としてもらったものだ。もともとリヨウの家にあったものらしく、宝石の類ではなくただの石だったので貰うことにも特に躊躇はなかった。もっとも、リヨウにとっては「取られた」という表現をしているようだが、ちゃんと同意の上である。

チカツと光ったのは、外からの光が反射したからだろう。ミナはカーテンを閉めると、そそくさと部屋を出た。

「まだ寝てた？」

先生が尋ねてきたので、ミナはこくりと頷いた。

「はい、小憎らしいぐらいに幸せそうな顔してました。心配して損しました」

あははと笑いながら言うと、先生もつられるようにして笑った。

「それはそうと、えーっと……」

手に持ったボールペンでミナを指しながら言葉を濁す。

「千早です」

「千早さんね。千早さんは、彼とどんな関係？」

随分とはっきり言ってくる人だ。仲の良い友達でもここまでストレートに聞いてくる人は久しぶりだった。

「友達ですよ。親同士が同級生だったらしくて、昔から家ぐるみでの付き合いがあったんです」

ただ、そういう質問は慣れっこなので、特に慌てる事もなく言っただけ。リヨウもそうだと思うが、どうも昔から一緒にいると異性とし

てみることに違和感がある。きっと、互いに子供だと思っているのだろう。それはそれで癪だが、とミナは思ったが、それもやはりお互い様かと思い直した。

先生は唇に手をあてて、ふくんとミナの目をじっと見つめた。

「じゃあ、家は近かったりする？　っていうか、家はどこ？」

「家は、まあまあ近いですよ。私、家が西区にある神社なんですよ。で、リョウ——箱崎くんの家はそのちょっと手前です」

「ああ、あの神社」

先生がぽんと手を叩いた。

「あそこの神社、よくお参りにいくんだけど、階段がキツイのよね。どうにかならないかしら？」

「さ、さあ……多分、どうにもならないかと」

この先生、冗談を言っているのか天然なのかいまいち分からない。今までの発言を聞くと天然のような気がするのだが。

苦笑いしながら答えると、「そうよねえ」と先生の方も笑っていた。

「箱崎くんは帰れそうならそうしてもらうけど、放課後まで寝たままだったら送っていったあげてくれないかしら？　それとも、部活とかやってる？」

ああ、そういうことかと、ミナは思った。

「部活は一応弓道をやってますけど、でも別にいいですよ。そこまで厳しい部でもないんで」

「そう？　なら助かるわ。今の発言は東郷くんには秘密にしようってあげる」

いきなり部長の名前が出てきたことに目をぱちくりとさせていると、先生は悪戯を成功させた子供のようにくすくすと笑うのだった。

＊

目が覚めて体を起こすと、軋む筋肉に少しだけ顔をしかめた。ぐ

っすり眠ったはずなのに気分が晴れない。夢は見たが、どことも知れない大自然が広がる光景を見ただけで何があった訳でもなく、だがやはり妙なリアルさを感じた。

カーテンから外を覗けば夕陽が窓から差し込んでいる。随分と眠ってしまったようだ。

覚め切らない頭を無理やり働かせて、リヨウはベッドから這い出ると部屋から出た。

「あら、起きたわね。気分はどう？」

ドアを開けてすぐの場所にある机で、先生がコーヒーを啜りながら尋ねてきた。そのコーヒー欲しいなあと思いつつ、だがそれよりも気になるものが視界に入った。

「えっと、なんていうか、微妙です。っていうか、何でミナが？」

別段具合が悪いわけでもないが、寝起きということもあり絶好調とはまた違うので、とりあえず微妙だと返事をして、そして先生と同じようにコーヒーを啜っているミナを見て目を細めた。

ミナはキャラクターの絵が描かれたマグカップを机に置くと、さも当然というようにリヨウに言った。

「あんたが体調崩したっていうから、迎えに来たんじゃないの。ほら、帰るわよ」

リヨウは眉をひそめた。

「お前、部活は？」

「一日ぐらい平気よ。ちゃんと部長には言ってきたし」

「別にそこまでしなくてもいいのに」

リヨウはポリポリと頭を掻いた。調子が悪いと言っても、ただ眠いだけでそこまで大事にするほどじゃないと、なかなか伝わらない様子に若干不満気だった。

「私が千早さんをお願いしたのよ。一人で帰らせるのはちよつと不安だったからね」

「そーいうこと。ま、いいじゃん。たまには一緒に帰るのもさ。一緒に帰るのって、中学校以来じゃない？」

そうだったのか、とリヨウは思い返した。なんだかんだで話す機会はあっても、一緒に帰るってことはほとんどなかった。リヨウはずつと部活には入っておらず、中学校ではミナが部活に入っていて一緒に帰ることもなくなったが、三年になって同じ塾に通っていた時だけは一緒に帰っていたのを思い出す。

それ以来か、とリヨウは思った。ただ、もう少し人目を気にしてもらえないかと、リヨウは少しげんなりした。ミナは周囲の目をあまり気にしていないようだが、リヨウは違う。古賀なんかは自分のちの関係を誤解しているようだが、リヨウはいい加減にしてくれないかとうんざりしているのだ。

ただ、ここで断るわけにもいかなかっただろう。肩を落とし、降参の意を込めて深くため息を吐いた。

「分かったよ。じゃ、荷物取ってくるから校門で待ってて」

「はいはい。それじゃあ先生、コーヒーご馳走様でした」

ミナが頭を下げると、先生はニコニコと笑って手を振っていた。

「どういたしまして。それじゃあ、気をつけて帰ってね。またいらっしやい」

保健室にまた来いとはどういう見なのか。内心そんなことを考えながら頭を下げて保健室を出ると、だるい体で登らなければならぬ階段を見て、思わずげんなりとするのだった。

「ふぁ……」

荷物を取って校門でミナと合流し、帰る途中でリヨウは隠すこともなく大きな欠伸をした。

「あんた、あれだけ寝ててまだ眠いの？」

隣で呆れたように言ってくる。

「寝すぎて眠いって、よくあるだろ。っていうか、昨日から別に寝不足って訳じゃないんだよ。なんか知らんけど、とにかく眠い」

保健室を出た時は寝起きだからと思っていたのだが、ここまでくると少し異常かもしれないと自分でも思い始めた。

「ふーん。ところでさ、あんたクリスマスはどうすんの？」

そういえばもうそろそろかと、相手のいない高校生男子には寂しいイベントの予定を聞かれて少し気分が落ち込んだが、それでも話を振ってくれるのはありがたかった。少しでもこの眠気を紛らわせたい。

「別に、予定なんかねえよ。お前は？」

「うちは家族でパーティーする予定。りっちゃんたちにもパーティーに誘われたんだけどね。でもやっぱりクリスマスは家族と過ごしたいじゃん？」

「りっちゃんって、赤間さんのことか。っていうかお前ん家、神社だろ」

「それを言ったらリョウの家だって仏教じゃない。いいのいいの、今時の宗教はボーダーレスよ」

「ふぁ……」

だめだ、眠くて仕方がない。なんとか会話を続けようとしても、出てくる欠伸が邪魔をする。

ミナは心配そうな顔をしてリョウの顔を覗き込んでいた。

「ねえ、大丈夫？ そんなに眠いって、普通じゃないんじゃない？ ちょっと休憩していく？」

二人はちょうど公園の前を歩いていたらところだった。夕暮れ時ということもあり誰もいないが、休憩ということは中にあるベンチで寝ろということか。多分ミナはそこまで考えていないだろうが、あともう少し歩けば家に着くのでそこまでする必要もないだろう。

「大丈夫だよ。家に帰ってから寝る……わ……」

「うわっ、ちょ、ちょっと!？」

あまりの眠気に足腰に力が入らなくなり、リョウは前につんのめって、ミナが慌ててそれを受け止めた。

「ちょ、ちょっとリョウ!？ 大丈夫!？」

本気で心配してくれているようだ。歩いていた人がいきなり倒れれば誰でも驚くだろうが、朦朧とした意識では何も考えられなかつ

た。

ミナがリヨウの体を支えながら、ポケットから携帯電話を取り出した。

「と、とにかく救急車呼ぶわよ」

「大丈夫だつて……そこまですなくても、ちょっと眠いだけだから……」

「バカッ！　ぶっ倒れるまで眠くなるのが普通なわけないでしょ！　とにかくそこに横になって——リヨウ！？」

ミナが驚愕の表情を浮かべてリヨウを見つめていた。どうしたのかと思っていると、チラチラと光が視界に入ってきて、一体何があつたのかと周囲を見回して、そして異変に気づいた。

光っているのは、リヨウ自身だった。さらに、自分の体が薄っすらと透けている。手をかざせば、自分の手のひらの先でミナと目が合った。

「ちよっ、えっ、何それ？　え？　え？」

ミナはパニックになっている。リヨウも当然冷静とは言えず、慌てふためきながら手を擦ってみたりパンパンと服を叩いてみたりしても何かが変わることはない。むしろ、体はどんどん透明になっていき、光は増しているような気がする。

そして、その光の量に比例して、眠気もどんどん強くなってきている。耐えられなくなった体はミナの体にのしかかり、必死に堪えようとしても体に力が入らない。

「リヨウ！」

ミナの叫び声に、氣力を振り絞って頭をもちあげる。とろんとした目に映ったのは、泣きそうな顔でリヨウの名を叫び続けるミナと、首もとでチカチカと光る瑠璃色のネックレス。そういえばそんなものをあげたなど、リヨウの意識は最後にそんなことを思った後、眠気は極限にまで強くなり、そして全てが白に包まれ、リヨウの意識は遠い場所へと旅立っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7714u/>

Dreaming Nighty Knight

2011年7月11日03時24分発行